

氏名	栗 田 啓
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1845 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和62年 9 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	肺癌における組織学的予後決定因子の検討
論 文 審 査 委 員	教授 折田薫三 教授 赤木忠厚 教授 木村郁郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

岡山大学第 2 外科において、1972 年から 1981 年の間に切除された 183 例の肺癌に対し、病理組織学的に、予後決定因子の検討を行った。腫瘍の 3 割面および所属リンパ節の最大割面に関し検討した。症例数の比較的多かった、術後病期Ⅰ・Ⅲ期例に関し、3 年生存者と非生存者間で比較検討し、以下の結論を得た。

1) Ⅰ期扁平上皮癌では、血管浸襲のない例の予後が有意によかった。腫瘍最大径 5 cm 以下の例、腫瘍内細胞浸潤の高度な例、所属リンパ節に傍皮質領域過形成の高度な例の予後がよい傾向にあった。2) Ⅰ期腺癌では、核分裂指数が 0.005 未満群の予後がよい傾向にあった。3) Ⅲ期腺癌では、壊死のない例、所属リンパ節に傍皮質過形成の高度な例の予後が有意によかった。腫瘍最大径が 3 cm 以下例の予後がよい傾向にあった。4) Ⅲ期扁平上皮癌では予後因子は見出されなかった。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

肺癌において術後病期別に組織学的予後因子を検討した報告は少ない。本研究者はこの面より検討し興味ある知見を得ている。すなわち、Ⅰ期扁平上皮癌では血管浸襲のない群の予後が有意に良いこと。Ⅲ期腺癌では、瘍内壊死のない群・所属リンパ節の傍皮質領域過形成の高度な群の予後が良いこと。Ⅰ期腺癌・Ⅲ期扁平上皮癌では予後因子がないことなど、臨床上有益なる多くの知見を得ている。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格のあることを認める。